

Heartful Day

北条高校人権委員会
平成27年3月4日
No.89

水平社宣言を知っていますか

1922(大正11)年3月3日、京都市・岡崎公会堂で全国水平社創立大会が開かれ、水平社宣言が読みあげられました。この宣言は、長い間、差別と迫害によってしいたげられていた被差別部落の人々が、みずからの意志で、奪われた人間性をとりかえそうとしたものであり、全人類の解放をうたう日本初の人権宣言です。

明治政府は、部落差別の解消にむけて、部落内の衛生面や生活面などの改善を指示したり(部落改善事業)、周囲の地区と自然にとけ込むような政策をとったりしました(融和政策)。しかし、このようなことで、部落差別がなくなることはありませんでした。

大正時代に入り、労働運動や農民(小作人)運動がおこり、自分自らが闘うという思想や風潮が生まれました。これは大正デモクラシーとよばれるもので、部落の人たちは、「このまま自然には差別はなくなる。自分たちが自ら立ち上がって真の部落解放をめざす」という考えをもつようになりました。特に1918年の米騒動は彼らをふるいたたせました。東京では平野小剣らが部落解放をよびかけてビラをまいていました。福岡県では松本治一郎らが部落解放運動を始動しました。そのような中、奈良県柏原では1920年5月、西光万吉、阪本清一郎らが「燕(つばめ)会」を結成していました。「燕会」では部落内の生活改善や貸し付けなどの活動を通して部落の民主化運動に取り組もうとする団体でした。そのような中、メンバーは「部落差別をなくすには部落自身が立ちあがらなくてはならない」と主張した佐野学の論文に大きな影響を受けました。そこで西光や阪本らは、自主的な解放運動を全国的に組織するため「水平社」を組織することにしました。絶対的な平等をあらわす「水平」は阪本清一郎が名付けたといわれています。

1922年10月に柏原の駒井喜作の家に「水平社創立事務所」を設立して創立の準備をはじめました。彼らは自主的な解放運動と団結を訴えた水平社創立の趣意書のパンフレット「よき日のために」を作成して全国に配布して、水平社創立を強く訴えていきました。

「よき日のために」の最初は「全国内の差別されているものよ。寄ってこい。起きてみろ。夜明けだ」で始まっており、ロシアの作家・ゴーリキの「どん底」から引用された「人間はいたわるものではなく、尊敬すべきものだ」という言葉もあり、彼らの思想をよくあらわしています。



みんなが幸せに暮らせるために

水平社宣言の最後は、こう結んでいます。

水平社は、かくして生まれた。人の世に熱あれ、人間に光あれ。

水平社は、水平の世を願って被差別部落の人々が連帯して、差別と闘うとともに、すべての人に光があたり、すべての人が差別という闇を打ち破っていく熱意を期待して生まれたのでした。その願いが「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉に結実したのです。

私たちの身のまわりを、「人権」という視点からもう一度考え直してみると、何気なく過ごしている日常生活の中にも、様々な問題があることに気がつきます。人は皆、幸せに生きる権利があります。お互いをいたわり、思いやることができれば、多くの人権問題は解決に向かうでしょう。

「人権の世紀」といわれる21世紀、私たちに求められているのは、すべての人々がともに手を取り合って生きることのできる社会です。差別を取り巻く現実を知り、私たち一人ひとりが人権について自分のこととして考え、お互いの人権を尊重し合うことが求められているのです。



担当：鈴木奈津美・續 優美

今年度の放送は、今回でおしまいです。来年度もお楽しみに。

さよなら、さよなら、さよなら…

お願い

今日の放送を聞いて生徒の皆さんの感想や、この資料をご家庭に持ち帰ってご家族の方で話し合ったこと、ご感想などをお寄せください。

提出は、ホームルーム担任まで

----- 切り取り線 -----

第10回ハートフルデー

()年次 生徒 or 保護者

